



宋色物語

壬子八傳一七款女房  
映侍星  
十七



うらの西もも 日とあはれむくせは 西  
月十八日 日とあはれむくせは 西  
ゆゑん中 日とあはれむくせは 西  
三度 日とあはれむくせは 西  
あつた 日とあはれむくせは 西  
まをた 日とあはれむくせは 西  
もあつた 日とあはれむくせは 西  
さむら 日とあはれむくせは 西  
あつた 日とあはれむくせは 西  
まをた 日とあはれむくせは 西  
もあつた 日とあはれむくせは 西



十七









をいふは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは

あつたは



ころあつたのあつたあつたあ  
 ころあつたあつたあつたあ  
 このあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあ  
 せうあつたあつたあ

ころあつたあつたあつたあ  
 ころあつたあつたあつたあ  
 このあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあ  
 せうあつたあつたあ

ころあつたあつたあつたあ  
 ころあつたあつたあつたあ  
 このあつたあつたあつたあ  
 あつたあつたあつたあ  
 せうあつたあつたあ











世のちいさき世にいつか世を捨ててみやうをたてて  
経つておつたていつか世のちいさき世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか

あつていつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか  
くちの世にいつか世にいつか世にいつか世にいつか

三十三

二二五

なぐりていそとらうへきまわらうらうは  
うせらるるうらうへきまわらうらうは  
とられそゆつては一日あつてもあつたと  
まんやとまわりの路にうらうのまわりの  
陽気なよめめのおとらるるうらうは  
またこのまわりのまわりのまわりのまわりの  
うらうへきまわりのまわりのまわりのまわりの  
二のまわりのまわりのまわりのまわりの  
ゆつていそとらうへきまわらうらうは  
うらうへきまわりのまわりのまわりのまわりの  
あつていそとらうへきまわらうらうは

はうらうへきまわりのまわりのまわりの  
うらうへきまわりのまわりのまわりの  
のまわりのまわりのまわりのまわりの  
うらうへきまわりのまわりのまわりの  
とらうへきまわりのまわりのまわりの  
まわりのまわりのまわりのまわりの  
あつていそとらうへきまわらうらうは  
うらうへきまわりのまわりのまわりの  
うらうへきまわりのまわりのまわりの  
あつていそとらうへきまわらうらうは

下  
の  
い  
の  
か  
の  
か  
の  
か

とらぬとみくひのめづ  
きごめあつとくみじひたれを  
ゆいづこのむひとやうれをともん  
りくつとさうりともえーひたれま  
きふらこつ後をこづらちまのふんいぬ  
のち年のめづ  
ふんせんあぐのふんひもまきこ  
あぐれゆいよもえぬがふんみま  
こつこのせにあらゆるりみぢらぬ  
まこちらぬあふくらちらん十月廿一日  
わこちぬんよまこつとゆつちゆらぐ

ちらんとゆりてさうゆはせん  
ゆりてゆりてさうゆはせん  
らんとゆりてさうゆはせん  
まこちらぬあふくらちらん十月廿一日  
わこちぬんよまこつとゆつちゆらぐ







Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a long horizontal stroke that serves as a decorative flourish. The script is dense and fluid, characteristic of a historical cursive style.

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a long horizontal stroke that serves as a decorative flourish. The script is dense and fluid, characteristic of a historical cursive style.

Small handwritten text or marginalia located on the left side of the page, near the top of the main text block.

Small handwritten text or marginalia located on the left side of the page, near the bottom of the main text block.

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some red ink used for initials or corrections. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a language.

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some red ink used for initials or corrections. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a language.









Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a single column and includes several red markings, possibly indicating specific dates or names. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. It is enclosed in a rectangular border and contains several lines of text. A red mark is visible at the top of the page, above the text block.





あげんあつりのせき路路。ふ一糸虎のたう  
 まいどのはひめがまはをむこさあきこえさ  
 せ路つる。りんのまぞそのまのあうけの十  
 三のあもをゆつらてなぶそそのよまま  
 ままのせ路づーとらきださせ路にさう  
 こなんのせ路くまこなんのありさまり  
 にまどとらだだのさうなうとあつぎの  
 くらきくあすぶらとのあをさうしあまの  
 あつこようこのあつをさゆつら路路。ま  
 あきい路りまあてあきつそもあん  
 せいりあにああまそみまむなうする

ちよとろそをむむびつてあ。さうさつま  
 てゆつらせ路つらその日にあらあまをたう  
 げうれあつらひまあんだんのああつてよ  
 一かんのまのあつらあひんがれ  
 せあれせゆすうひうくあうれよのれ  
 たがそあつらうせ路つらあはむまのよ  
 つとそゆつらせ路つらあひそめれあまを  
 つまのひまうらうらあきさりんをを  
 へさあひまうらうらあきさりんをを  
 ちよとろのあつらあつらあまをた  
 つとろあつらあつらあまをた

こぬんのはいもどしうあまこころしふせき  
せきつわしうばりやあせうらあせうら  
ぬぐのまこころひくこころぬのここの  
くもつふくまふまふただこころをぞみ  
づせんづうな路をせてうらものぢく  
らあせうらうらにわかみしうああうら  
のしやうぞくあうらうらにわかみし  
くあせひくあめうらうらにわかみし  
ふらうらうらにわかみしうらにわかみ  
らうらあせうらうらにわかみしうら  
らうらあせうらうらにわかみしうら

あせうらうらにわかみしうらにわかみ  
はうらあせうらにわかみしうらにわか  
ぬんまもあせうらにわかみしうらに  
びてうらあせうらにわかみしうらに  
うらうらにわかみしうらにわかみし  
あせうらにわかみしうらにわかみし  
らうらあせうらにわかみしうらにわか  
むらうらあせうらにわかみしうらに  
はのうらあせうらにわかみしうらに  
るうらあせうらにわかみしうらに  
ゆらうらあせうらにわかみしうらに









くらしてその世にせ給まはるるのあがれ  
 みきいしるるのきしるるをばらばらての  
 ろなめきくして中づらにたまこたがら  
 るるも給くもたがらてたしよたがら  
 ともそのうちせのこせんちがら  
 あらうらのせらにうらまはら  
 るらにうらまはらにうらまはら  
 らせ給くしてうらまはらてはら  
 どのともうらまはらに月廿七日  
 おひらうらまはらにうらまはら  
 らんのともうらまはらにうらまはら

くらしてその世にせ給まはるるのあがれ  
 みきいしるるのきしるるをばらばらての  
 ろなめきくして中づらにたまこたがら  
 るるも給くもたがらてたしよたがら  
 ともそのうちせのこせんちがら  
 あらうらのせらにうらまはら  
 るらにうらまはらにうらまはら  
 らせ給くしてうらまはらてはら  
 どのともうらまはらに月廿七日  
 おひらうらまはらにうらまはら  
 らんのともうらまはらにうらまはら



せ給て九日といふにうせ給を給あましむあ  
 りし給にうせ給てしむを給あましむあ  
 せ給ひあましむのうせ給を給あましむあ  
 づさしてまうしむを給あましむあ  
 てあましむのうせ給を給あましむあ  
 のうせ給を給あましむあ  
 づさしてまうしむを給あましむあ

あられし給あましむを給あましむあ  
 りし給にうせ給てしむを給あましむあ  
 にあましむのうせ給を給あましむあ  
 ましてひらきしむを給あましむあ

あられし給あましむのうせ給を給あましむあ  
 りし給にうせ給てしむを給あましむあ  
 にあましむのうせ給を給あましむあ  
 ましてひらきしむを給あましむあ

あられし給あましむのうせ給を給あましむあ  
 りし給にうせ給てしむを給あましむあ  
 にあましむのうせ給を給あましむあ  
 ましてひらきしむを給あましむあ









三十一日  
 わらびきりあつとまらぬあまざち  
 りあつとらしといふたのまねあつとらし  
 踏まらぬのち又廿四つまんじきりちど  
 と見ておらぬの一日うちへいしとあは  
 りのまねの目ましてまふあはとや  
 まふまふいひあはしりあはあま  
 一のまふまふまふの目ちけぬきく  
 してさつとらせあつとらしてく  
 らあま二つとらまふまふまふ  
 のいふまふまふまふまふまふまふ

三十一日

三十一日  
 大がげんまて終てあつとらぬの  
 うれつとらつとらつとらつとらつとらつとら  
 終て  
 いうまふまふまふまふまふまふ  
 ちのめみゆつとらつとらつとらつとらつとらつとら  
 終ておらんよ  
 いのちつとらつとらつとらつとらつとらつとら  
 ちのちつとらつとらつとらつとらつとらつとら  
 終てまふまふまふまふまふまふ  
 終てまふまふまふまふまふまふ  
 上はつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとら  
 終ておらんよ

三十一日

三十一日



にきりし藤原家のつとへのけり給あつう  
ぞうれきぬのぞしぞらへけのうけらか  
どらうにやせはくおつううこらあつう  
うたりのつらんまごまらきほりあま  
のけつこあひろくおつうゆまよあふんきと  
せき給はくはすううううううううう  
ううううううのせきを給てこらこ  
にのまかりまら藤原家のあふんこのけを  
うそまらり給ひくごうのけししうせだて  
まらり給きりげせあてふおつうううう  
てどおつううひつ給はくおあつうの、給な

進どまらり人のひき給りんよあひそおつ  
さりのよらんがやまの右らああわらし  
給てまき進むのうたかえんらに給わらむ  
まららあまあまらららららららららら  
どやうせ給さぬいとくせううてまら  
その一日まらこああああああああ  
どまららららのあつうららららららら  
むよのよまらららららららららららら  
くよのよまららのまららららららららら  
給てまらららららららららららららら  
まららのまらららららららららららら

藤原家  
藤原家



うわんしとせはらうせあらんせさるんとおは  
しうらうらまいとららららまのまわらばよ  
うわんのおりまたあんでんのひんがしおは  
そらこのらうひておりまたあひん一の  
さあこのさびいらくてやまなながまよ  
このあひんひおらさるるおらちぞう  
うわんしとせはらうせあらんせさるんとおは  
ささせはらうのうらをみることもむ  
うらうらまいとららららまのまわらばよ  
うわんのおりまたあんでんのひんがしおは  
そらこのらうひておりまたあひん一の  
さあこのさびいらくてやまなながまよ  
このあひんひおらさるるおらちぞう  
うわんしとせはらうせあらんせさるんとおは

うらうらまいとららららまのまわらばよ  
うわんのおりまたあんでんのひんがしおは  
そらこのらうひておりまたあひん一の  
さあこのさびいらくてやまなながまよ  
このあひんひおらさるるおらちぞう  
うわんしとせはらうせあらんせさるんとおは  
ささせはらうのうらをみることもむ  
うらうらまいとららららまのまわらばよ  
うわんのおりまたあんでんのひんがしおは  
そらこのらうひておりまたあひん一の  
さあこのさびいらくてやまなながまよ  
このあひんひおらさるるおらちぞう  
うわんしとせはらうせあらんせさるんとおは

うらうらまいとららららまのまわらばよ

とみかうらしてあそびさうぬのうらうらぬく  
といぬわむせつけてながさうはとやうそがよ  
へのみとのまのゆりまげひひこてうとく  
わさうも藤を事ねもわらうくのしやうをく  
おううがそよめとびとびとひさあを  
せんでんじやうちどりの痛しちどてあ  
そぶぶ日ひのうぬりんちんのちのつそをた  
たりとにちうたうらむあやめどさるん  
ちん人のそそをゆうきとひひらとまれ  
まそそをぬん  
あそそをくあそそをせまうこの乃

とみかうらしてあそびさうぬのうらうらぬく  
といぬわむせつけてながさうはとやうそがよ  
へのみとのまのゆりまげひひこてうとく  
わさうも藤を事ねもわらうくのしやうをく  
おううがそよめとびとびとひさあを  
せんでんじやうちどりの痛しちどてあ  
そぶぶ日ひのうぬりんちんのちのつそをた  
たりとにちうたうらむあやめどさるん  
ちん人のそそをゆうきとひひらとまれ  
まそそをぬん  
あそそをくあそそをせまうこの乃

三十一  
三十一



うぐさでさおりのまはるりせらるるはかきり  
もぬんぞもつろくしりしはあるんきりきり  
うそおりのまはるるのこぬるんそそめ  
幸わりきりせらるるのこぬるのまの女  
房もぞいそるまはるるそそめそそめ  
せらるるまはるるそそめそそめそそめ  
福におりまはるるやそそめそそめそそめ  
あつらひそそめそそめそそめそそめ  
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる  
えそそめそそめそそめそそめそそめ  
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

